

脇本平也をしのぶ——TMC 記録第二

井門 富二夫

東大宗教学研究室の史的な展開については、周知のように、『時と人と学と』あるいは『日本宗教学会五十年史』（共に 1980 年）などなどのような公式記録や、ほんの一例にすぎないが、『九学会（八学会）年報』各号のような学会記録にも報告されている。多少、私的な回想記録には、『宗教学年報別冊』（以下『年報別冊』）や国際宗教研究所『紀要』を典型例として、南山宗教文化研究所やその他の『紀要』類にも数多くの発表がある。研究者もふくむ一般読者対象の「中外日報」や各商業新聞、あるいは文科省の「宗務時報」などにも、数多くの関係記事がある。

そうした記録の存在を承知したうえで、本研究ノートあるいはエッセイでは、柳川啓一・脇本平也を同窓仲間とする TMC グループが、当のグループの直接的な師の世代すなわち岸本英夫・大島清・小口偉一・堀一郎（いわゆる宗教学第二世代）の後継者として、柳川・脇本の二人が研究室を引継いだ 1960 年代から脇本の死に至る 2008 年までに行った勉強・情報交換の活動について、再検討してみる。『宗教学年報』29 号（2012 年、同誌は以下『年報』）には柳川を中心とした回想をのせ、この号には脇本への各自の協力でいまだに明確とされていない活動事情について語るつもりであった。

柳川についての回想エッセイを、『宗教学辞典』などの発行、また社会的には東大学生騒動（彼は、それを時代変換の象徴としての祭りと結論）の全面的関与など以降は、柳川が身体的疲労・病いがちのこともあり、研究や指導を彼本来の命題（後に彼自身がわれわれに伝えたように、「聖と俗の二分のかなたへ翔ぼうとする体験」をふくむ「聖と俗の交わる世界」を社会変動にそうて分析）⁽¹⁾に集中してゆくこともあって、1975 年でとどめることにした。そのみならず、『年報別冊』3 号（1986 年）に、1970 年代までに主として柳川の教え子であった人々の柳川時代の回顧が行われていたこともあった。

また、時には当時の「履修案内」に文化科学として紹介されることもあった宗教学が、哲・史・文学の人文科学、ならびに法則定立的認識をめざす社会諸科学のそのいずれでも行こなされる事実を示し、かつ学際学的視点や比較方法にいかに関与するかを、大局的に示した、ユネスコ『社会諸科学および人間諸科学の研究の主要動向』（1970 年）も発表されて、TMC グループの議論も目立って拡散していったこともあった。

と、いうことで 1975 年以降の柳川の研究室内外での活動については、金井、井上という助手

体験者や阿部美哉のように柳川の活動（とくに対外的なもの）を全面的に支えた人々の、すでに発表されている回想に委せることにした。

さて、今回は脇本平也を主とする対象にして、彼が TMC 世代のリーダー格にまつりあげられる終戦直後の東大宗教学研究室の状況から始めるが、前回の柳川啓一を中心とした回想録の中で既に述べられた展開や、意外なことに数多い脇本自身の回想報告や関連論文・エッセイなど⁽²⁾に言及されている様々な報告内容はできるかぎり省略する努力をしたつもりである。

前回の回想録同様、TMC 前史（1960 年以前）から始めてみるが、2013 年の終りには、TMC の活動に多く関係された、柳川淑子夫人と久我光雲さんの昇天の報せもあって、かつまた、『年報』特別号・30 号（2013 年）に大局的立場からみごとに東大宗教学の変遷を描写された林淳さんの報告に、終戦直後の環境を生きたわれわれの眼から多少の付け加えを行いたい気持もあって、今回も脇本の活動を主としつつ、前史にも視線をあてることになった。

林淳さんの報告に、戦後の岸本先生をリーダーとする「新しい宗教学」への展開努力が詳述されているが、この報告には、いくつかの視点から、多少のつけ加えが必要と考えられる。終戦直後のゼミであったか研究会であったか、アーヴィン・キングの『宗教の発達——人類学及び社会心理学よりの研究』（本書は 1910 年、訳は寺澤智了・高野正治訳『宗教の発達』1925 年）がわれわれに先輩学者からつきつけられて、宗教とか政治・経済とかの、研究対象からの研究（いわゆるデシプリンの視点）に対し、例えば人類学などという研究方法からの、あるいみでは学際的かつ比較的方法もあって、単純に宗教学「講座」などという組織上の用語に安住するなど云われ、先輩の一人、古野清人先生から、そういう立場から自分は「宗教＝社会学」と対象と方法を明示しつつ、講座や科目組織を受け持っていると言われた覚えがある。この直後あたりから、棚瀬あるいは杉浦などという先輩の先生方が、宗教も文化の一端として、言語その他の分野もすべて同様にふくめて、人類普遍のもの、そして特殊地域のものと、それぞれに統合的に研究するか、あるいは、文化・社会からみるか、個々の人格・精神現象からアプローチするのか、などなど、現在の環境における人間の行動そのものから（当然のことながら、未開とか先進社会などという研究者の偏見の見地からの区分は放棄して）、研究者自身の選択する定義すなわち対象の限定を明白にしつつ、「宗教現象」も文化・人格的複合の一つの現れとして、把握されることになる⁽³⁾。そのような把握を前提として、宗教学・言語学・政治学・経済学などなどと同一分野の研究者が集まる諸組織（科目統合組織）が組まれるのであって、人文・社会・自然諸科学のすべての視点をふくむフィロソフィおよびサイエンスが、高等教育・研究として成立するというのである。

その当時からはるか後に展開することであるが、グローバルな立場から（特に第一・第二次世界大戦を経て、環境のグローバリゼーションが展開する 1920 年代以降の状況）ものごとを分析すると、以上の観点はより集約されて語られるが、すなわちロバートソンや阿部美哉らは環境の複雑化の中で「宗教」概念が諸イデオロギーの間に拡散し、サイエンス・オブ・レリジョンがサイエンス・オブ・カルチャーに衣替えせざるをえなくなる状況を画くことにもなるが、とにもかくにも、林淳さんの云う「新しい宗教学」（アメリカの行動科学をとりこんだ方向）は、八学会（九学会）年報でみられるように、諸学全分野で広がる研究状況のその一つの流れにすぎな

かった事実を強調しておきたい⁽⁴⁾。

古野先生らがまだ研究室の周辺に姿をみせられる終戦直後には、小池長之さんのように卒業後すぐに大学に就職された方々をのぞいて柳川らごく少数の学生に、研究会であったか、すでに先生方の間でまわし読まれて表紙のボロボロになった、当時は新刊されたばかりの、キングスレイ・デイヴィスの *Human Society* (K. Davis, Macmillan Co., 1948) が示され、宗教とか信仰なども、すべて意味をもつもののシンボル化されたものにすぎないとする分析が教えられた。

幸いにもと云うべきか、脇本平也は、この研究会には出た覚えがないとわれわれに後に語ったものであるが、後に宗教学講座をうけ持った頃の柳川には、パーソンズの総合科学にゆきつくまでの支えになったはずである。

脇本平也の研究室への再登場は、宇野円空先生をめぐり集まった古野先生らの先輩方がそろそろ職を得て地方に散られる頃であったが、学生でも教団出身者らは卒業同時に姿を消したものの、後に残った研究者志向の数少ない院生の生活支援には、助手・副手ポストの他に、旧制度の続く昭和 20 年代では、戦時中に理系を主として大学での研究に専念させるため特別研究生制度（いわゆる特研で奨学金の返済を求められない育英制度）があつて、旧学制度が終る昭和 29 年度まで続いた。文系では研究室毎に一ポストが与えられたが、助手同様に学生の生活の面倒をみるのに忙しく、研究専念とは題目のこのみで、案外といやがられたポストとなっていた。昭和 24 年の新学制制度発足と共に、育英資金本来の姿にもどして、大学院終了後に資金を返済する特別奨学生制度（いわゆる特奨）が設けられたが、時の経つとともに特研同様に研究室での世話業の中心となったが、むしろ学会などが求める研究・調査への参加が主な仕事でもあつた⁽⁵⁾。

まわりくどい説明に寛容を乞いたい、脇本平也がいつの間にか、後の TMC 世代（新学制制度の発足する昭和 24 年以前の卒業生ら）のリーダーとなった事情が、以上の特研・特奨制度の展開にもかかわっている。

脇本の復員がおそかったこともあり、旧制度大学院での、特研ポストは田沢康三郎さんの特研ポストが野村暢清さんに、もう一つのキリスト教など研究のポストが赤司道雄さんに渡されていた。その後すぐに赤司さんの慈恵医大予科や立教大予科（後の教養部）への就職とともに、柳川がこのポストを受け継いだ、すでにその頃、戸田義雄助手の新制度発足とともに大学への転出が予測されていたこともあつて、旧制度大学院修了間近の脇本平也が助手を受け継ぐであろうことは、われわれには自明のことであつた。

旧制度で学生・院生であつた戦中派では、野村さんらは岸本先生の GHQ での仕事の援助で、赤司は自分の教会牧師の仕事や自由宗教連盟の運営などで、研究室の援助や学生指導は手伝うことなく、脇本が戸田さんを助けてわれわれ学生の指導や生活支援に当たってくれていた。云うまでもなく、TMC 世代は、その頃から脇本を世代のリーダーと認めていたが、同窓の柳川は旧制三高以来の先輩・後輩の関係で、また藤谷は宗派関係もあつて卒論指導を脇本にあおいだこともあつて、特に深く脇本に私淑していたはずである。私も研究室最初の特奨として（旧制院生になつたものの、生活資金に困っていたこともあり、岸本先生の命令で自由宗教連盟のセクレタリーやデュ・ボスらの国際調査の一員となつていたこともあり、今岡先生に乞われるままに正則学院教師を兼業することになつて）脇本助手の最初の手伝人として週二日の研究室勤めとなつたおかげ

で、すでに語りつくされている岸本先生の洋書研究会の運営などに当ることとなり、また三峯見学などゼミ旅行の世話もさせられた。

記憶がはっきりしないが、柳川が（淑子夫人との恋愛がこの頃始まったこともあって）特研ポストを久我光雲さんにわたして正則の専任教師になったはずであるが、久我さん自身もめざす文学研究に専念したいと、北海道の高校に逃げ出し、このポストはたしか土屋光道さん（寺院経営の仕事もあった）に渡ったと思う。とにかく脇本の助手仕事は忙しく、昭和 27 年であったか、野村さんの九大就職をうけて田丸徳善さんが特研ポストをうけとり、フルタイムで脇本を支援され始めて、やっと脇本もわたしたちも一息いれることができた。その後、松本滋らが研究室支援に入る頃となって、昭和 30 年に新学制制度の大学院が始まり、脇本は助手を辞め、われわれ旧制度生もフルブライト奨学生などとなって渡米・渡欧するわけであるが、私たち旧制度の東大生活は脇本平也の指導の中で、岸本・大島両先生の教育を生きのびたと云っても過言ではない。

小野泰博、土屋光道さんらは、新制大学院院生の宮家準・高木きよ子という人々と共に、脇本グループとは異なる三康研究会を組まれたが、確かに新学制による博士号取得という、われわれ旧制度学生にはなかった目的に取り組む人々も多く、各人独自の研究志向が目立ち、かつまた育英・奨学制度の拡大・一般化のこともあって、各人を研究室に束縛する（特研ポストのような）義務・手段もなくなったと思える。高木きよ子さんの記憶では、新制大学院院生は、全員が相互扶助のかたちで研究室運営や IAHR 会議日本開催の準備を助けたとの由である。

私事にわたることとなるので、詳細は省略するが、後に TMC が組織される理由の一つに、柳川や藤谷もふくめ、全員が結婚から住家探し、相互の生活扶助にかかわり、たとえば、脇本夫人は赤司道雄の教え子であり、柳川や私らは赤司教会で結婚式をもち、あるいは藤谷は宣教師となって渡米してからも、脇本や私たちとの縁を保っていたが、後日、彼の息子が米山俊直教授の息女と結婚する際には、印哲の平川教授の司式に私が仲人役を勤めるなどというように、全員が（ただし、赤司は、牧師職でかつ先輩と称して TMC 仲間には入らなかった）、生涯にわたって脇本を中心に結びついてきた。1960 年に研究会として始まった TMC も、東大出版会から『宗教学辞典』や『講座 宗教学』（全五巻）が出る頃には、研究会としての性格を失い、単なる同窓会的存在⁽⁶⁾になり下っていたことは前にも書いたが、ごく最近になってつみ重なりあっていた資料・書類の中にあつた記録や書簡などから思い起してみると、岸本先生の「宗教の定義をめぐる研究会」あたり、すなわち 1960 年以降、脇本が東大を定年退職し、以後、国際宗教研究所の理事長などを勤める頃になっても、『宗教研究』など機関紙の論文について合評会を開いたり、あるいは仲間うちが編集したり、宗教学関係者が裏でかかわる著作や講座ものに、ある程度、支援を行うなどの、研究世話機能を、TMC は脇本をリーダーとして強力に継続していたはずである。そのうちのほんの一例にすぎないが、土屋博さんと長谷千代子さんが、『宗教研究』の書評欄⁽⁷⁾でさまざまに取沙汰されたことについて、それこそ発病寸前の脇本がさまざまな批評を残し少ない TMC メンバーに聞かせた記憶がある。たとえば、1997 年の『叢書 現代の宗教』（全 16 冊）には「ここには宗教概念を検討するという共通の問題意識が見られない」という土屋さんの批判に対し、脇本によれば、宗教学者以外のたとえば精神医学専門家なども入れて、当時問題になっていたカルトや死生観など、*spiritual but not religious* ともいうべき生きざまの、そのスピリチュアルな

ものへの、各界からの研究状況を展開させたものであって、——全ったく編集者からは各著者になんの説明もなかったが、脇本によると編集の背景にこの命題の専門家である阿満利磨さんらの発想があったとか？の由——土屋さんの批判は多少酷かなということであった。

また長谷千代子さんが、同誌の書評冒頭で問題にされたデューイらのいう宗教的 (religious) と宗教 (religion) の概念定義や境界領域の設定などについては、その場にいたわれわれ全員が、これは 1960 年当初の「宗教の定義をめぐる諸問題」研究会などで、あらためて検討し直された問題であって、終戦前後からティリッヒの死の直前まで、ティリッヒや私の生涯の師となった J・L・アダムスが論じつくした世俗化のプロセスの中での、いわゆる宗教や霊的世界のあり方についての命題で、デューイらもその論争から『誰でも宗教』を展開させたのではないかと考えるわれわれは、あらためて『岩波講座 宗教』を手に入れて検討しようときめたものである。

私自身は書棚の資料類の中からアダムスや岸本先生あるいはティリッヒその人らから手渡されたものをあさっている間に、たしか脇本の死の二、三年前あたりに、J. L. Adams, “What Kind of Religion Has a Place in Higher Education?” (*The Journal of Bible and Religion*, Nov. 1945, Vol. 13, No. 4) など、研究会で「世俗化」「宗教の種類」を論じるための——すべて岸本先生の蔵書か——さまざまな資料をみつけ出したものである。また、岸本先生昇天後に、たしかベラーからもらった本と思うが、彼の著作の“beyond”概念の背景にある‘The Absolute beyond religion and non-religion’ ‘ultimate concern’ など、『存在する勇氣』(*The Courage to Be*, 1952) 以来のティリッヒの命題を彼がさらに詳しく論じた *My Search for Absolutes* (P. Tillich: Simon and Schuster, 1967) も棚から出てきたが、ここに、広いかつより拡大された宗教の概念 (自身や世界の存在への究極的な思念)⁽⁸⁾と、よりせまい宗教や信仰 (具体的な象徴体系あるいは宗派的な、個人的な表明) について解説されている。

脇本を主として TMC を考え直してみるとこの論考を始めたが、脇本の東大への復帰から定年退職あたりまでは、ほぼ「別冊」29 号にも描写されており、ぬけているのは、彼の大蔵精神文化研究所やさまざまな仏教研究会での一般人への教育活動など、そして (彼は決して表立つようなことはしかなかったが) 創立以来の国際宗教研究所や、今岡信一良先生や赤司道雄との関係で自由宗教連盟や帰一教会などで働いたこと、などであろうか。今岡先生の亡きあと帰一教会の解散には理事長としてかかわったことなど、TMC には直接には関係がないので、ふれないでおく。

ともあれ、1970 年代後半であったか、脇本が自由ヶ丘の家を立ち退いて、平塚に移り住み、東大や国際宗教研究所、そして宗教学会大会開催や学会関連の諸会合に出席・参加するために、東京に出てくる時は、KKR の目黒などの宿舎に泊まったものであるが、その際は必要事務連絡のあとで、必ず TMC メンバーに電話をいれ、われわれ世代が関係をもつ命題や後輩たちの研究動向などを語りあうための会合を持ったものである。

研究会合のはずが、藤田や安齋ら飲んべえのために、いつの間にか飲み会になってしまうことも多かった。

しかし、メンバーの誰かの関心を持つ話題のある時には、一同まるで若返ったように論戦に走ったものであった。岸本先生のすすめであったと思うが、*The Annals of the American Academy of Political and Social Science* を、東大や筑波大の連中にも私たちは購読させていた。そのアナ

ルの1993年に、「文明の衝突」にかかわる論文がのった時、脇本が、学士会館の一室で、これこそ1960-70年代から吉本隆明や後にベネディクト・アンダーソンが論じてきた「幻想としての国家・文明」をさらに世界的に拡大して論じたものではないかと、彼が早くから（1960年代後半）もち上げてきた吉本を引用して、彼の意外な一面にわれわれ一同が驚かされた日のことは、はっきりと覚えている。わたし自身は北京の国際的な学会からもどってきた翌週のことであり、今でも脇本の関心の広さに感銘をうけたものである。

晩年の脇本にかぎって、TMC 会合を考えてみると、野村暢清さんが九大から久留米大学に移られて、たしか久留米で宗教学会が開催された時であったと思うが、アメリカで世界貿易センターのビルが攻撃され、多くの人々が予期せぬ死にみまわれたことがあった。この学会で脇本はアニマティズムの理念を新らしく発表して、日本人の死生観の特異さを論じたものであるが、東京に帰って会合を持った前後に、広井良典『死生観を問いなおす』（筑摩書房、2001年）が発表されていて、またもそれに関連して茂木健一郎『生きて死ぬ私』（徳間書店、1998年）も引用しながら、脇本の生涯の研究命題であると本人のいう「スピリチュアル、霊性」「死生観」の背景にある永遠の「今」の理念について、語ってみたいということがあった。

この会合の前に、安齋らが亡くなっていて、とくに、人間（個性）として「在る」こととは何かという問いが、残り少なくなったわれわれの間で意識されていたが、TMC 仲間の研究会合はこれが最後となったはずである。この会合以降、2003年の江の島旅行や2005年のIAHR 東京大会の後の会合では、四人ばかり生残する同窓の間では、研究会合といえるほどのものはなく、ただ例外的といえるのは、さきにあげた「宗教研究」の書評欄について、藤田と私に語った機会があったことぐらいであり、これも研究会というよりも、学会後の出会いであった程度である。

なお、この頃に小田垣雅也教授が自らの教会説教の中で体験的に発表された「一期一会」の存在論的理念についての印刷物が、わたしや脇本の手に入り、あらためて脇本が自分の死生観について便りをよこしたが、この便りこそ自らの死期を意識した報せでもあったかと、今になって考えられる。

その後2007年の末であったか、自らの発病・入院の電話があり、同時に脇本夫人の病情や家族についての詳しい現状報告めいたものや、自分の葬儀などについての連絡が入り、（これはTMC 仲間というよりは、赤司道雄以来の教会関係、あるいは家内の出身校と家族の方々との関係などもあって）、また、これこそ一期一会のはじまりと終りと、短いあいさつがあった。当方もあわてて、島菌さん達に連絡をいれて病院に駆けつけることになったが、後で聞くところによれば、万事自らで準備を済まされていたようで、まことに脇本らしい動きといえた。

終戦直後から敬愛の念をいだいてその指導をあおいできた脇本の人柄については、（彼の身近にいた学生諸氏には、多少の異論もあろうが）、彼の名著『宗教学入門』（講談社学術文庫版、1997年）の解説に、山折哲雄さんがみごとにまとめておられる。ある会合の出席者の一人が、スピーチを求められて、「本日の研究会に出席するためはるばるまいりました。しかし本当の目的は――ただ、脇本先生にお目にかかるのが楽しみで出かけてきたのです」といって、そのまま着席したという。わたしたちは、この人こそアメリカ派遣を終えて九州にもどっていた藤谷政躬であろうとすぐに思いついたが、今となっては記憶もうすれ、たしか淑徳大学で宗教学会があった時の

ことであつたと思うが、(立教大学の学会の時か迷いもするが、学会終了後の池袋の会合に柳川の姿は見えなかったはずで、板橋の淑徳での学会の時ではないか) 藤田富雄が学会会合で藤谷に会って脇本とゆっくりと話してみたいという要望を聞いて、すぐに TMC の集りをしたいと、東武百貨店の屋上に高く設置された料飲街の、田屋であつたか、藤田の昔日の教え子が店長をつとめるレストランにわれわれを集めたものである。

昭和 22・3 年頃といえ、戦前の厳格な講座制もまだ続いていて、戸田助手が教授室に茶を運ぶ私らに、目上に茶をささげて持ってゆくようにと注意される雰囲気研究室、ゼミ室に残っていた。こういう状況で、卒論指導や人生相談にのってくれる先輩といえ、ただ一人の院生であつた脇本平也しかいなかった。助手・副手はむしろ教師側にたつて研究室運営に忙しく、後の TMC のメンバーとなる学生たちも、アルバイトなどに忙しく、相互に話しあう機会はほとんど無いといつてよい状況。私と安斎・浅野の三人組はキリスト教グループを組んで、生活資金稼ぎなどに行動を共にしていたが、藤谷は終戦後に宗教学専攻をきめて学部学生となつたわれわれとは異り、たしか脇本同様に、戦中に宗教学専攻として入学した学生であつたかと思う。脇本とは浄土真宗と宗派背景を共にしていたうえ、とにかく同学の先輩として脇本の人柄に私淑していた藤谷は、人生の大半をすごしたアメリカから帰国して、晩年をいかにすごすか、あるいは真宗信仰にもとづく死生観など話しあうには、脇本ひとりが頼りであつたかと思う。

田屋での話しあひは、店長が閉店・閉館の時間ですとわれわれを追出しにかかるまで続いていたが、事情を知る藤田も私も二人の和やかな議論をただ聞くのみで、楽しい三時間ばかりを過ごしたものである。

学生諸君や脇本家の人々の中には、脇本の厳しい叱声などを聞いた者もあると、脇本夫人からは伝えられたこともあるが、親鸞その人や歎異抄に親しんでいた脇本は、本稿の(注 2)に引用した彼の短い自伝「自分と出会う」に、自ら、名利に人師をこのむなり、と言ひ、またたえず自らを愚身とよんで、人間として存在する現象に疑問をもち、また自身の専攻した宗教心理学でマズローの人間観(パーソナリティの意味)に親しみを抱いていた彼は、現実には相手の身になつて、人々と接する、「やさしさの人」であつたと、TMC 一同は考へている。

晩年には、脇本が自らの専業たとえば国際宗教研究所理事長などの立場から、学会人事や学生・後輩の就職などを決めることが多かつたなどと批判する者もいたようであるが、脇本自身の相手の立場を尊重する、常なるやさしさを熟知するわれわれの間では、教師・先輩の立場にある者には、迷惑なことよ、と笑いとばしたものである。

終りのまとめには、TMC メンバー全員が大正時代の生れであり、戦前のわが国の軍事優先時代に学校教育をすごしていたが、丸山眞男が報告してくれたような上から規制的に社会を統制した自由の一かけらもない環境を全く知りもしない戦後生れの教師や学生の、安易なナショナリズムを、常々、会合毎に嘆きあつたことに触れておきたい。脇本の海軍軍服の姿、柳川や私の兵卒軍服のなさけなさ、などなどしばしば笑い話として、会話の話題になつたが、その TMC メンバーも残り少なくなつた。

註

- (1) 月刊『伝統と現代』（13号，1971年12月，文化科学入門）から、『思想』（思想の言葉——1979年11月，665号）などを経て、『宗教理論と宗教史——聖と俗の交わる世界』（旺文社，1982年）。
- (2) 脇本平也の宗教学研究の簡単なまとめともいえる「宗教と宗教研究」（『宗務時報』94号，1994年）をはじめとして，簡単な自伝「自分と出会う——名利に人師をこのむなり」（朝日新聞，2002年2月4日），から，彼の数多い論文・エッセイの他に，彼の履歴案内（駒沢大『宗教学論集』19号，1996年）や，彼への追悼文（『年報』別冊26号，2009年）などなど。
- (3) このあたりの宗教学，あるいは「宗教」概念設定のあり方などをめぐって展開する宗教批判——とくに人間そのものや，文化の中の宗教機能の複雑さ——については，島菌進「宗教学の成立と宗教批判」（『宗教研究』357号，2008年）など，同号にある諸論文で，徹底的に論述されているので，これ以上は，省略したい。
また早くに（1972年）に，『文化科学入門』（『伝統と現代』13号）に，柳川啓一らが参加して，同様に諸学分野の展開が詳述されている。
- (4) 以上で判明するように，また，『人文』（2巻1号，人文科学委員会，1948年）で，小口偉一「宗教学の科学性」がつよく反論しているにもかかわらず，昭和24年以後の新学制では，予算措置で特別手当の認められた「実験講座」に，文学部＝人文科学系に所属しているというだけで——社会学・心理学は除き，「宗教学」は加えられず，林淳さんのみごとな描写（別冊30号）にあるように，「新しい宗教学」の方向は，あいまいなものになってしまった。岸本宗教学のみならず九学会連合の，科学的調査重視の観点はここで一頓挫をむかえた。
- (5) このあたりの事情については，『時と人と学と』（東京大学文学部宗教学研究室，1980年）の戸田義雄，野村暢清，脇本平也という三先輩の回顧（59頁から70頁）に詳細が述べられている。
- (6) 各メンバーが，専任職・定職をはなれ，宗教学会などで顔をあわせる機会も少なくなった1980年代以降，各年に一回，酒宴の会合などを開くほか，夫人同伴で，箱根，日光，多摩御嶽山などへ同窓会旅行を行ったものである。なお，このような機会に相互の健康状況や家族の状況などを報告しあったものであるが，最終の会合は，2003年の江の島旅行であったが，この頃から脇本夫人の晩年の病いがすすみ始めた様子である。
- (7) 『宗教研究』（348号，2006年）。この頃ともなるとTMCメンバーの生残者は四人ばかりとなっていて，むしろ昔日の回顧談が主となっていたはずである。
- (8) 1950年頃，キリスト教系奨学金でシカゴ大学に留学，ティリッヒ研究第一人者であるJ・L・アダムスの指導を受けた土居真俊教授の『ティリッヒ——人と思想シリーズ』（日基出版部，1960年）には，「人間存在にとって究極に意味あるもの——それは存在論的地平において認識されるもの」とされ，脇本や藤田は，これを西田幾多郎の「絶対無の場」とか「絶対矛盾の自己同一」の思想と対応できるような説明とわたしたちに言ったこともあった。